

論文の要旨

論文題目	文補語標識「こと」「の」の意味的相違に関する研究
氏名	渡邊 ゆかり
学位	博士（文学）
授与年月日	平成21年3月25日

現代語における文補語標識「こと」「の」は、次の(1)のようにいずれも選択可能な場合と、(2)(3)のようにいずれか一方の選択が制約される場合とがある。

- (1) 太郎は、次郎が新しいゲームソフトを買った {こと/の} を知っている。
- (2) 太郎は、魚が泳いでいる {の/*こと} を見ていた。
- (3) 太郎は、水を自由作文の題材にする {こと/*の} を思いついた。

このような現代語における文補語標識「こと」「の」の使い分けに関する先行研究は数多く存在するが、いずれも共時的観点に基づくもので、通時的観点をも視野に取り入れたものは存在しない。

しかしながら、現代語における文補語標識としての「こと」「の」の使い分けの原理は、これらの通時的な意味変化と深く結びついている。

従って、本研究においては、文補語標識「こと」「の」の通時的意味変化について考察するとともに、この考察において得た知見を踏まえ、現代語における「こと」「の」の意味的相違を明らかにすることを目的としている。

第1章においては、上記の本研究の目的を明示するとともに第2章以降で取り上げる内容を紹介した。

続く第2章では、本研究を動機づける背景として、文補語標識「こと」「の」が伝統的な国語学の分野ならびに生成文法の分野においてどのような文法範疇として扱われているのかについて概観した。その結果、立場や研究者の相違により、文法範疇の命名の仕方は異なるものの、いずれの研究者も文補語標識「こと」「の」に対して補文を名詞化するという文法的意味しか認めていないことが確認された。また、文補語標識「こと」「の」の「体言性(nouniness)」の相違について分析している Momiyama(1987)を紹介し、「こと」「の」の間に「体言性」の相違が存在することを確認すると同時に、両者の間に体言性の相違のみならず、語彙的意味の相違が存在する可能性を指摘した。

第3章では、まず、補文の叙実性と「こと」「の」の選択との関係について考察している先行研究を取り上げ、次に、文補語標識「こと」「の」の使い分けに関する先行研究のうち、特に両者の語彙的意味の相違についても考察しているものを取り上げた。これらのうち前

者においては、補文の叙実性と「こと」「の」の選択との間には明確な因果関係がないことが確認された。また、後者については、久野(1973)、Kuno(1973)、Josephs(1976)、McCawley(1978)、橋本(1990)を取り上げ、「こと」「の」の意味についてのそれぞれの説明が、一部の言語事実を説明するには有効であるが、説明に合致しない表現例も存在することや、説明に対する解釈が多義的であるといった問題点を指摘した。

この後、第4章―第6章では、現代語における「こと」「の」の意味的相違を考察する前段階として文補語標識「こと」の意味的変遷について文学作品中の用例調査に基づく考察を行った。

まず、第4章では、文補語標識「の」がまだ出現していない中古に遡り、中古の文学作品を対象に行った文補語標識「こと」の使用に関する調査の結果を示した。本調査は、2回に分けて行った。1回目は、中古の日記、随筆に相当する「枕草子」「紫式部日記」「土左日記」「かげろふ日記」「和泉式部日記」「更級日記」(『日本古典文学大系』19巻、20巻岩波書店所収)に対して、2回目は、「源氏物語」(『日本古典文学大系』14巻―18巻岩波書店所収)に対して行った。まず1回目の調査では、述語の種類という点から、補文の表すコトガラの存在性に関する情報を表す述語、ならびに文補語が伝達内容を表している場合の発話行為述語が、主に「こと」を選択することが明らかとなった。また、心情述語については、「こと」を選択する場合と、連体止めで終わる場合とがあり、コト止文補語の多くは、述語の表す心情発生時に将来における実現が予想されるコトガラを表すものであるという特徴が確認された。次に2回目の調査では、中古語における文補語標識「こと」の働きの中に、「存在性に関する言及対象を示す」働きや「発話伝達内容を示す」働きのみならず、「補文の表すコトガラの未然性を示す」働きや「補文の表すコトガラの主体にとっての重大性を強調する」働きが存在することが明らかとなった。また、これらのうち、現代語には存在しない「補文の表すコトガラの未然性を示す」働きと「補文の表すコトガラの主体にとっての重大性を強調する」働きは、上古より存在する、連体修飾要素を伴わない「こと」の意味から派生したものと推定した。

次に、第5章では、中世語、近世語における文補語標識「こと」の使用に関する調査の結果を示した。本調査では、文部科学省共同利用機関国文学研究資料館がウェブ上で公開している、日本古典文学作品データベースにおいて、中世〈説話・小説〉〈随筆、随想・説教〉〈劇文学〉〈物語〉〈評論・国学〉、近世〈説話・小説〉〈随筆、随想・説教〉〈劇文学〉〈物語〉〈評論・国学〉で検索しヒットした作品を対象とした。また、本調査においては、「聞く」を語基とする動詞述語文、「知る」を語基とする動詞述語文、「忘れる」を語基とする動詞述語文、「やめる」を語基とする動詞述語文を抽出し、これらにおけるコト止文補語の出現傾向を調べた。調査対象をこれらに絞ったのは、先の中古語の調査において、これらの述語文が取るコト止文補語の出現傾向が現代語のそれと異なることが確認されたからである。本調査の結果、情報の所有を表す「知る」については、中世語、近世語と時代が下るにつれ、未然のコトガラを表すコト止文補語の出現率が低下し、已然のコトガラを表す

コト止文補語の出現率が上昇するという傾向が見られた。また、情報の所有を表す「聞く」、同じく情報の所有を表す「知る」、コトガラの失念を表す「忘れる」、ならびに「やめる」を合わせたものについても、「知る」と同様の傾向が見られた。このことは、文補語標識「こと」の働きの一つとして中古語に存在していた、「コトガラの未然性を示す」働きが時代の変遷とともに衰退していったこと、ならびにそれに代わる新たな働きが生じていったことを物語っている。また、「コトガラの重大性を強調する」働きも中世語から近世語にかけて衰退していることが確認された。

次に、第6章では、近代語における「聞く」「知る」「忘れる」「やめる」を述語とするコト止文補語の出現傾向を調査し、近世以降さらにコト止文補語の出現傾向がどのように変化していったのかについて分析を行った。本調査においては、CD-ROM版『明治の文豪』、CD-ROM版『大正の文豪』に収められている全作品から、「聞く」「知る」「忘れる」「やめる」がコト止文補語、連体止文補語、ノ止文補語を取っている表現例を収集した。本調査の結果、まず、情報の所有を表す「聞く」については、中世語から近代語にかけて已然のコトガラを表している場合のコト止文補語の出現率が80%台まで有意に上昇していることが確認された。このことは、近代語に近づくにつれ、文補語標識「こと」に、発話伝達行為の対象となるコトガラと類似関係にある発話受容行為の対象となるコトガラの意味が加わっていったことを物語っている。次に、「知る」「忘れる」については、経験的意味の獲得や失念を表す場合にコト止文補語を取る傾向にあることが確認された。また、情報の所有を表す場合には、未然のコトガラを表すコト止文補語の出現率が45%–63%の範囲内に落ち着いていること、已然のコトガラを表すコト止文補語の出現率が50%台にまで上昇していることから、文補語標識「こと」に存在していた「コトガラの未然性を示す」働きの衰退が進む一方で、文補語標識「こと」に「宣言的知識」という新たな意味が派生された可能性を示唆した。最後に「やめる」については、情報の所有を表す「知る」「忘れる」と類似した変化が確認できるものの、未然のコトガラを表すコト止文補語の出現率は、10%台と低かった。これは、「やめる」がコトガラの実在性を大きく左右する行為であることによると考えられる。

以上、第4章–第6章までは、特に文補語標識「こと」の意味的変遷について考察したが、続く、第7章では、中世末期–近世初期に登場したと推定される用言後接型準体助詞「の」の成立背景と意味拡張について考察を行った。その結果、第4章–第6章で見た文補語標識「こと」の意味変化や論理化による連体形準体句の衰退の影響を受け、連体形準体句がしだいにそれ独自の語彙的意味カテゴリーを形成するようになり、この意味カテゴリーを表すものとして用言後接型準体助詞「の」が体言後接型準体助詞「の」から派生されたという結論に至った。

最後に、第8章、第9章では、第7章までの考察を踏まえつつ、現代語における「こと」「の」の意味的相違について考察を行った。第8章では、ヲ格文補語標識として用いられる「こと」「の」に、第9章では、ガ格文補語標識として用いられる「こと」「の」に焦点

を絞り、分析を行った。本分析に際しては、前章までの考察を踏まえ、「こと」「の」の意味仮説を提示し、「こと」「の」を用いた表現例を用いてこの仮説の妥当性を示すという方法を用いた。分析の結果、現代語における「こと」と「の」の意味的相違は、基本的に「概念」と「実在」という意味概念の相違と対応していることが確認された。また、「概念」「実在」には、様々な種類のものがあり、ヲ格文補語標識とガ格文補語標識とでは、「こと」が示す「概念」ならびに「の」が示す「実在」の種類が異なることを示した。

最終章となる第10章では、前章までの内容を概観した後、文補語標識「こと」「の」の意味的相違が我々の意識の働きと密接に関わっていることを指摘した。また、この原因の一つとして、「こと」という形式が「事」に加え、「言」すなわち、「意識」の存在を前提とする「言葉」を本来の意味としていることを挙げた。